

農村—地域社会としての持続



梅田 安治 (うめだ やすはる)

北海道大学名誉教授、(有)農村空間研究所 所長、
(一社)北海道土地改良設計技術協会 顧問、
北海道土地改良事業団体連合会 顧問

1932年札幌生まれ。北海道大学農学部卒。農学博士。同大教授を経て現職、地盤工学会功労賞、農業土木学会学術賞、日本農学会賞、読売農学賞、国際水田水環境工学会国際賞などを受賞。著書は、『エッセイ：泥炭地』『地域・環境・景観：北海道の農地・農村で』『土地改良に魅せられて四十余年そして十年』『土地改良の周辺』（6篇）など多数。

欧米と日本の社会を比較して内山節は、欧米の社会は世界創造神が背後に超越的に存在する、生きている人間の社会である。それに対して日本の社会は伝統的には自然と人間、生者と死者の社会であった。自然と共に死者と共に社会を作るという発想である、としている。自然と死者が含まれているというのである。池澤夏樹は『春を恨んだりはいらない—震災をめぐる考えたこと』（中央公論新社/2011.9）で、「我々はこれからずっと脅えて暮らすことになる／今も、これからも我々の背後には死者達がいる」と言っている。

これで思い至るのが、作家玄侑宗久である。福島第一原発から45kmのところの福聚寺ふくじゅうじの住職として放射線量や風向きを気にしながらも、檀家だんかのお墓のある地を離れることは出来ないと、多くの住民が避難する中で踏み止まって農家の苦況の聞き役をつとめ、僧侶として何人もの死者を見送ってきたとのことである。また、福与徳文は農村集落の存廃・合併・持続の可能限界の指数として、葬儀施行のための人員確保の可能性をあげている。日本の伝統的社会が現存する農村社会の状況、可能性を表現するものとして、死者との対応・供養の在り方の必然を示すということなのであろう。一方では生産・生活行動面での潜在力を示すともいえよう。

いま、日本の社会の人として、内山節に生者と死者とを並存させられたとき、一瞬戸惑うものがあったが、それは、私たちが死者を特別に異者と無とかにせず、死者が生じたときもある種の祭礼をもってこれまで同一体であったものに接点を生じたことを確認し、その後も供養などを通じて連結していることを当然としてきたことなどによると、気付かされるためである。

私たちの一般的な（無意識に）“もの”“こと”への対応として、私たち個々は人間のみでなく自然のものも含めてその生命には時間的限界はあるが、個から個へと時間的に継続して、それらの個の集団＝社会は持続されていく中でこそ有限の個々の存在が可能であると捉えている。いわゆる世代から世代へ、次世代へと社会は継続されて行くのは当然であるとしている。そこには、家族があり地域があり国があり世界があり、大なり小なり政治がある。

しかし、私たち個についての次世代へのバトンタッチを考えると、次世代とは何かが問題である。いま、同時代を生きている人達である。そこには時間的ラグ（ずれ）はあるが、次世代とは隣人なのである。次とは隣であり横である、同世代である。

次世代に継続するという事は同世代として横へ脇

への伝達しかないのである。前世代から個の中へ浸透してくるものと考えるとき、いま親と子、年代の違いはあり親子は共存している。しかし、一般的に言うならばやがて親は死者となり、子は生者として生存する。つまり、想い・行動などを伝承するのは共に生者であるときで、多くの交流・交歓・疎通があることによつて生・死者となつても伝承しうるのである。

また、それは親子という単線連結ではなく、多くの血縁、地縁の連携があつて確実なものとなるのである。縄を^な縋うがごときものである。一本一本の^{むら}藁の長さは当然限度があり、一本の藁でも末端と先端ではその性質などに多くの差異がある。その末端と他の先端を接したからとて、継ぐというよりもつなぎようもない。それを多くの異なった位置（時の流れ）で重ね合わせて束ねることによつて、その先端末端の位置が程よく分散し、それなりの形状を成すことになる。それを^よ撚る（＝縋る）ことによつて結束というか横隣の藁との接触が密になる。

個々の藁は親世代と子世代とが少しずれて重なり合つていくだろう。先の藁、次の藁、それに横に次（隣り）の藁、（隣り）の（隣り）の藁と。そして、横に次の藁は同列に横というよりも少し縦方向にずれての隣となり、互いに縦方向に少しずつずれて重なるように並ぶことになる。その藁も全く同一のものではなく、それぞれに若干の異なりがあり、ときには綿糸や針金などの入ることもあり、それは縋うことによつて多くのものが密着して、引っ張りの強度を増したり^{くつとう}屈撓性（たわみ）が出たりと、それぞれの特性が相互作用して縄を作ることになる。

ただ、ここで縄となる藁＝^{とうかん}稻桿は、ただ並べばよいのではない。それでは撚り寄せたときに互いに巻き付き接することが十分でないおそれがある。そのために、荒縄^{よこづち}縋いでは稻桿に水分を含ませ横槌（丸木に柄をつけた槌。頭部の側面で物を打つ）などで^{たた}叩き、それぞれを柔軟にする準備作業が必要であることを知るべきであろう。

その断面が現在の社会ということか！

いま、荒縄の素材となる藁は一つの生命である。それが寄り添いからみ合うことで相互につながり一つに統合され、縄として個々の生命が能動的に生きることにより、一つの〈いのち〉を創出して人々の存在の可能性の持続の場を形成するのであろう。

私たちの生命は時々刻々に変化していく要素・素材の連続性によつて構成されている。例えば《食べものは体の中に入って体の一部に変わるけれども、もともとそこにあった分子は分解され体の外に捨てられた、ということが考えられます。つまり、食べものの分子は単にエネルギー源として燃やされるのではなく、体のすべての材料となつて、体の中に溶け込んでいき、それと同時に体を構成している分子は外に出ていくということです》（福岡伸一『生命と食』）と。動的平衡（dynamic equilibrium）と呼ばれる状況である。ただ、そのような状況を微視的に観察することによつて事象について理解は可能であるが、生命自体の理解には至れない。[生命→動的平衡=動的秩序を自立的に形成する]から、そこには情報を創成する能力があると認識すべきである。

グローバル化、国際化が叫ばれて久しい。それぞれの国、地域、またその関係は変化していく。私たち日本・北海道にもその風は嵐のごとく吹き荒れている、と同時に、人口減少が予測され、その社会の維持・持続が懸念されている。現況の発展システムの市町村単位をいま少し小さく[一本の縄として縋える大きさまで]分割することによつて、生物としての自分たちの生命持続・生活文化を再構築する、そんなシステム変更が必要なのではないか。それは、これまでの文明化の逆戻りに見えるだろう。しかし、過大過剰を回避して自然資源に相当、対応するシステムなのである。

いま、地域という縄は断面にその結束力を、縦に持続を示している。その縄を切断されることなかれ、ほぐすことなかれ。

私たちの生命は、地域・周囲の人たちとの共同・共存することによつて躍動し得るのである。